
忘れたくないもの

ハヤシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

忘れないもの

【著者名】

ハヤシ

N1305M

【あらすじ】

今はもう会えない大好きだった人との忘れない思い出

出逢い

初めて会つた日はドキドキして眠れなかつた。

大して気乗りのしない、後輩からのコンパの誘いの飲み会。遅れてきて、目の前に座つた彼方から目を離せなくなつた。

少し茶髪のくせ毛に、笑うと半円になる目。

童顔な顔に生えてる不精ヒゲがアンバランスで、すごく魅力的だつた。

その日に、メールアドレスを交換して、別れて。

好きになるまで、そつは時間はかからなかつた。

今でも思い出す。あの頃は本当に毎日が楽しかつた。

彼からのメールで一喜一憂して。

朝から晩まで、仕事中もずっとずっと、考えるのは彼方の事ばかり。

舌つたらずで可愛らしい口調で話すから、

「可愛い」

つて言つたら、

「なんでっ？」

つて本氣でムスつとする。

ものすごく男氣があつて長男氣質。

でも、どこか纖細な感じで、何かを秘めているようなところがあつた。

大好きだつたから、もっと知りたいけど聞けない。

大好きだつたから、彼の全てを抱きしめたいって思つたけど、日々、2人で積み上げていてる何かを壊しちゃいそうな気がして、

いつもどこかで彼に対して踏み出せない自分が居た。

(今夜、22時頃電話していい?)

つてメール。大体、いつも、気遣ってくれて電話もくれてたよね。
会う訳でもないのに、ものすごく、緊張して、ドキドキして時間近くになると

トイレに行くにも、お風呂に入るにも、携帯握りしめて歩いてたから
携帯は汗まみれだったつけ。

「もしかして結婚してた事ある?」

つていきなり聞いた時、電話の向こうで一瞬止まつたよね。
何回目かの電話だったかな。

なんで、結婚してた事があるんじゃないか?って思つたんだろう。

何となく、そんな感じがして、思わず電話で聞いてた。

「うん・・・」

って言われた時は、自分で聞いておきながら驚いた。

彼は1年前に離婚したばかりだった。

ものすごく好きだった元奥さんは、とても育ちの良い人だったらしい。

何かで一度、憤慨して手当たり次第にモノを投げた彼に、恐怖を覚えて実家へ

帰つてしまつたらしい。

そして、その時にお腹の中に居た、2人の大切な宝物も勝手に堕胎してしまつたそうだ。

泣きながら何度も、産んでくれつてお願いしたけど、ダメだつたつて。

正直、あり得ない事だと思った。

彼の一方的な話だったから、事実は分からぬけど、元奥さんは、子供のような人だったんだな・・・って。

その時、まだ離婚の事、子供の事、引きずつてるつて言つてたな・・・それを振り切る為に、大型バイクの免許をとつて、ハーレーを買つたんだつて。

だから、私が会つた時は、毎週末には必ずバイクに乗つて、

あちこち旅してる人だった。

女をとつかえひつかえして、孕ませて、平氣で中絶させる男だつて多いのに、その出来事を真正面から受け止めて、一つの命を無くしてしまつた事に、今でも苦しんでる彼はとても純粋なんだな・・

つて思った。

命の重さを考えれば、当然は当然なんだけど。
恋をしていた私には、その彼の傷を抱きしめてあげたかった。
でも、私には入れない部分で。
何をしてあげられる事もできなくて、
ただ、ただ、彼の話を聞いて、泣いてるだけだった。

彼の先輩で池田さんという人が居た。

初めて会つた飲み会の時も、池田さんと一緒に。いつも2人はつるんでいて、

週末のハーレーの旅も、2人で楽しそうに出かけていた。

楽しそうにバイクの話や、行つた先々の話をしている2人を見るのが、とても好きだった。

池田さんはとても穏やかな人で、私にも優しく接してくれた。

日曜日は必ず、彼は池田さんと2人で出掛けてしまう。

私は、どこへも行けずにひたすら、彼からのメールを待つ。

夕方、近くまで帰つて來た所で、

「今、〇〇だから、後何分位で着くけど、一緒に夜ご飯どう?」

という連絡。

そして、そのまま、池田さんを含めて3人で食事。

そんな日曜日が当たり前になつていった。

今でこそ、高速道路はバイクは一人乗り解禁。でも当時は、二人乗りは出来なかつたから、自分も連れて行つてなんて言えない。

その上、2人で好きなように、バイクで走つてるの時間が好きなんだなつて感じたから、その時間を邪魔したくなかった。

ちゅうとした連休があると、2人はテントや寝袋を持って、長距離で出掛ける。

その間、置いてけぼりにされているような寂しい気持が。

今頃、どこかな・・・？

なんていつもいつも考えて。

（今、〇〇県で美味しいうどんを食べてるよー）とか、
（池田さんと一緒に、お土産選んだから楽しみにしてー。）
つていうメールの文字を、何度も何度も繰り返し見ていた。
バイクにまたがる彼に想いを馳せてた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1305m/>

忘れないもの

2010年10月17日00時11分発行